

## 小詩會詠草 : 文苑

著者	卯の花, といち, 芒村, 工藤, 忠輔
雑誌名	龍南會雑誌
巻	103
ページ	37-38
発行年	1903-12-25
その他の言語のタイトル	小詩会詠草 : 文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5647">http://hdl.handle.net/2298/5647</a>

## 小詩會詠草

卯の

花

かくてなほなほ罪の世のなど戀しかくても弱き我れの心か  
 夜半起きて罪のかなしみ悔ゆるとき熱き涙の頬に流るゝ  
 しみもなく罪なき羊はふられて血ににじみたる犠牲にえの祭壇みづくま  
 椰子の葉は夕日の影に彩られ地平の極みもの動く見ゆ  
 銀燭の光眩ゆき夜の宴鼓取る子や眉のか細き

○

と

ち

野に立ちてさても淋しき我の影や都出づるに何の歌ありし  
 美しき思ひ出あれの秋の暮阿蘇のけふりのことさら高き  
 椎の實の梢はなれしわれなれば土をかつぎて地に黙せんか  
 ひやくかに秋の潮よする岩に立ちて投げし小石の低き音になく

○

芒

村

このまゝにたかき聖影まのひもあふがずて夢野の闇をたどりゆく身か  
 たそがれの小河のするゑに橋みゑて岸邊の櫺に秋風ぞ吹く  
 春の夜の月朧なり卯の花の白きにこもる夢なからずや  
 棕櫚の葉のみだれわびしく秋更けて風にかぐやくゆふづゝの影

おぼる夜を梅さくかげに見し夢の覺めてののちの影かぐはしさ

拾三回紀念式賀歌

工藤忠輔

(調箏曲雪のあした第二)

拾三絃のしらべは盡きぬ乙女のおもひなり、

千代のさかるとぞ知る十三年のこしかた

俳句

紫溟吟社

漱石先生選

秋晴や鹿にもものやる旅の人呼雲

秋晴や左京道蕎麥の花全

庭の隅に鬼灯熟す農家かな全

貧居士の秋を籠りて唐辛子全

團栗の煮ても焼いても喰はれぬよ全

喪にこもる四十九日の夜寒かな全

鹿祭町にそれたる小鹿かな 百日紅

石を割る音かんくと行く秋や全

行秋や寺に預けし鉢の物全

蕎麥の花に夕日の翳き小山哉 百日紅

引越して家具をさまらず夜寒の間全

唐辛子青き乍らに辛きかな全

葉は散りて眞赤になりぬ蕃椒全

引越して小庭に虫を聴く夜かな全

朝寒や團栗落つる石の段全

落ちてこるふ團栗の實や筐の上 吞舟

唐辛子どんと忘れて蕎麥からし全

鶉の銀杏に鳴くや冬近し 龍翠

灯火の消むなんとして夜寒かな全